

桜ヶ丘遺跡

県道佐野川上野原線道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992.12

上野原町教育委員会

桜ヶ丘遺跡

県道佐野川上野原線道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992.12

上野原町教育委員会

序

開発工事では、必ずといってよい程、先住民の住居跡や、それに伴って実にいろんな遺物が発見されます。

「摩加不思議な存在」私は遺跡や遺物を見る度毎に、そんなことを思います。出土した土器にしても、石器にしても、一見なんの変哲もない、ただ一つの物体にしか見えませんが、これを手にして、しばし眺めていると、何千年という悠久の時を越え、縄文人の手のぬくもりや、生活の鼓動が伝わってきて、私たちを古代生活へ誘う役目をするからです。

「考古学は鍼を手にした哲学である。」と、ものの本で読んだ記憶があります。発掘は地質学、植物学、歴史学はもとより、遺跡や遺物から彼等の生活様式、経済、文化、食生活、物資の交流ルート、葬制等、当時の社会構造のすべてを読み取る力が求められる。そのためには深い思惟や思考、推理、推測、大胆な仮説と解釈、古代への遠大なロマンを馳せる等、故に考古学は鍼を手にした哲学であると。

今回の桜ヶ丘の発掘では、縄文土器から須恵器にいたるまで発見されましたが、古くからこの地が、生活の快適地であることを物語っていることを思わせます。

終わりに関係機関の皆さん、ならびに直接調査に従事していただいた方々に敬意を表し、序とします。

上野原町教育委員会

教育長 遠藤諦三

例　言

- 1 本書は、山梨県北都留郡上野原町上野原地内桜ヶ丘遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、県道佐野川上野原線道路改良工事に伴う事前調査で、山梨県大月土木事務所の委託を受けて実施された。
- 3 発掘調査は、上野原町教育委員会が実施した。その組織はつぎの通りである。

調査担当 小西直樹（上野原町教育委員会社会教育課）

上原 学（前上野原町教育委員会文化財主事）

参加者 （一般）荒井 泉、出羽和夫、和智幹一、荒井 貞、杉本すきい、豊田ヨシ江
(都留文科大学考古学研究会) 北島洋史、松井基幸、堀越隆浩、今 陽子、中尾政弘、折原尚子、長野朋水、田口弥子、荒川弘如、井上京子、伊藤 孝、関屋延行、高畑紀子、細谷林子、小村明子、矢田真司、小池信和、山川信彦、糸山珠実
(整理作業) 清水峰子、水越桂子、古根村典子

- 4 本報告書の執筆・編集は、小西直樹が行った。
- 5 本報告書にかかわる出土品、記録図面等は一括して上野原町教育委員会が保管している。
- 6 発掘調査及び整理作業にあたっては以下の方々のご指導、ご協力を賜った。

山梨県学術文化課、新津 健、都留文科大学考古学研究会、久保寺泰子（順不同）

凡　例

- 1 遺構の縮尺は、土坑 1/30、小穴群 1/40である。
- 2 遺物の縮尺は、1/3である。
- 3 土器断面図のスクリントーンは、胎土に植物繊維を含むことを示す。
- 4 土層図、断面図の「 m」といった数値は、標高を表す。

目 次

序

例言

第Ⅰ章 調査にいたる経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 周辺の遺跡	2
第Ⅲ章 調査の方法と層序	6
第Ⅳ章 遺構と遺物	7
(1) 遺構	7
(2) 遺構外出土遺物	10
第Ⅴ章 まとめ	12

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置 (山梨県)	1
第2図 桜ヶ丘遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第3図 周辺の地形と発掘区 (1/1500)	5
第4図 全体図 (1/500)	6
第5図 基本土層図 (G区北壁)	6
第6図 土坑	7
第7図 B区小穴群	8
第8図 E区小穴群	9
第9図 遺構外出土遺物	11

写 真 目 次

図版1 遺跡遠景、調査前全景	図版4 小穴群、土層断面
図版2 遺跡近景、調査風景	図版5 出土遺物
図版3 1号土坑、2号土坑	

第Ⅰ章 調査に至る経緯

- 平成3年5月31日 山梨県大月土木事務所より、文化庁宛に桜ヶ丘遺跡の工事届を提出する。
- 6月26日 上野原町教育委員会より、文化庁宛に発掘調査の通知を提出する。
- 7月4日 発掘調査を開始する。
- 8月16日 発掘調査を終了する。
- 8月23日 上野原町教育委員会より上野原警察署宛に埋蔵物発見届を提出する。

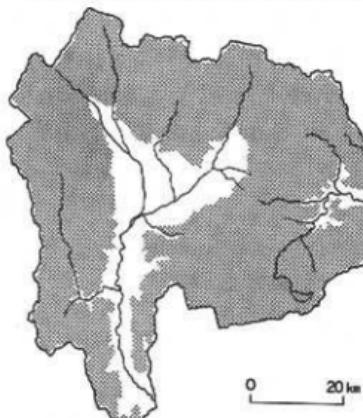
第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境

(1) 地理的環境

桜ヶ丘遺跡のある北都留郡上野原町は、山梨県の東端に位置し東京都・神奈川県と接している。町面積の79%を山林が占めており、この山々を縫うように桂川とその支流が流れている。

桂川は相模川上流にあたる。富士北麓に源を発した桂川は、道志、丹沢山地の周縁を大きく迂回して神奈川県で相模川と名を変え相模湾に流れ込んでいる。

上野原町を含めた桂川下流の流路は、ほぼ西から東である。右岸の道志、丹沢山地に目立った支流はないが、左岸には南北方向に大きな支流が見られる。すなわち、大菩薩山系を源とする葛野川と、小仏山系を源とする鶴川がそれである。各支流はさらに樹枝状の水系を伴って山地を開析し狭小な河岸段丘地形を形成しており、桂川流域の特色ある景観を呈している。



第1図 遺跡の位置（山梨県）

町内の河岸段丘は高位、中位、低位の3段に大別されている。高位段丘は開析がかなり進んでおり標高320～340mである。中位段丘は最も広範囲に分布しており標高は265～390mである。現在の市街地はこの段丘上に立地している。低位段丘は現流路からの比高が最も小さくなっている。

今回報告の桜ヶ丘遺跡は、中位段丘の中で最も広い平坦面である上野原面縁辺部に位置し、標高は258m前後である。東に山梨県と神奈川県とを画する境川が流れしており、本遺跡との比高差は約50mである。周辺は宅

地化が進んでいる他、遺跡南端が国道20号線により大きく断ち切られており遺跡の残存状況は悪い。かろうじて残された畠地が今回の調査対象地となった。

(2) 周辺の遺跡

これまでに町内で確認されている遺跡は100ヶ所近くにのぼるが、その大半は河岸段丘上を中心とした平坦地に分布している。時期ごとに見た場合では縄文時代が圧倒的に多く、とくに中期に至って急激な遺跡数の増加が認められる。大倉遺跡は中期中葉の敷石住居址1軒、堅穴住居址1軒が調査されている。平呂遺跡では中期中葉の堅穴住居址1軒、川合遺跡(37^{註1})では中期後葉の堅穴住居址2軒がそれぞれ発掘調査されている。各遺跡とも桂川、及び支流に面した段丘平坦面に立地している。一方、山間のわずかな緩斜面にも分布している。穴沢遺跡(16^{註2})では早期、前期を主体に多量の土器片、石器が出土しており、陥穴状土坑が6基発見されている。

弥生時代以降、遺跡数は減少している。とくに弥生時代は遺物散布地が数箇所確認されているにとどまっている。平安時代の発掘調査例は、大堀I、II遺跡(7、8^{註3})で平安時代の堅穴住居址が各1軒、仲大地遺跡で堅穴住居址2軒が知られている。

本遺跡の位置する上野原面は遺跡が多く確認されている所である。とくに段丘背後の山麓には本遺跡を含め、根本山遺跡(2)、上野原小学校遺跡(3)、西シ原遺跡(9)、大堀遺跡I、II遺跡(7、8)、山風呂遺跡(10)、向風I、II遺跡(11、12)が点在しており、縄文時代、および平安時代の遺物散布地とされている。上野原小学校遺跡は縄文中期中葉、後葉の土器、土偶、石棒、石皿、磨製石斧、打製石斧、後期の注口土器が出土している。上野原面にはこの他、塙場古墳群(4)、関山遺跡(5)、孤原遺跡(6)が知られている。塙場古墳群(上野原古墳群)は本遺跡の南約50mに位置し、円墳、前方後円墳が數基あったとされているが、現在は周辺の宅地化が進みその詳細は確かめられない。関山遺跡は台地南端に位置し、中期曾利期の堅穴住居址1軒の他、土坑、集石、配石が発見されている。

註1 上野原町埋蔵文化財調査報告書1『牧野遺跡・大倉遺跡・大堀I遺跡』上野原町教育委員会 1980

註2 上野原町埋蔵文化財調査報告書2『川合遺跡・関山遺跡』上野原町教育委員会 1989

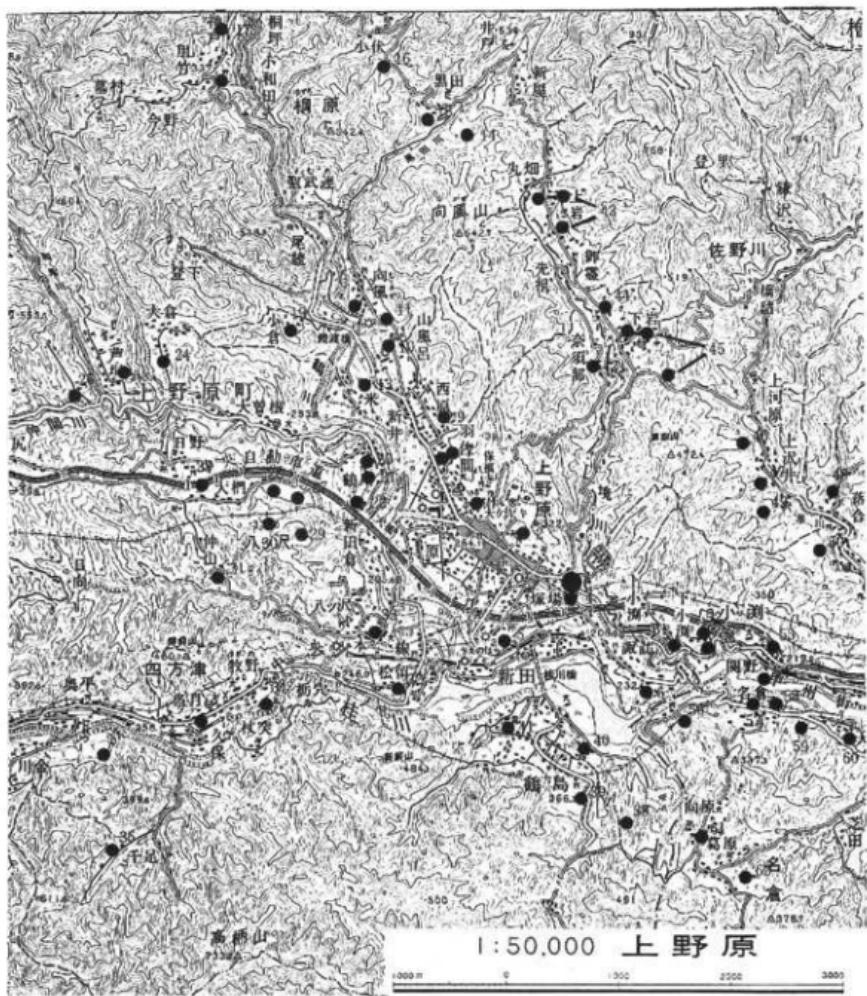
註3 上野原町埋蔵文化財調査報告書3『穴沢遺跡・カイル遺跡』上野原町教育委員会 1992

註4 前掲註1

註5 『仲大地遺跡』上野原町教育委員会 1976

註6 『上野原町誌(上)』上野原町誌編纂委員会 1975

註7 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第36集『関山遺跡 I』山梨県教育委員会 1988



第2図 桜ヶ丘遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	桜ヶ丘遺跡	縄文、平安	32	松留遺跡	縄文後期
2	根本山遺跡	縄文中・後期、平安	33	八ツ沢遺跡	縄文中期
3	上野原小学校遺跡	縄文中・後期	34	牧野遺跡	縄文中期、平安
4	塚場古墳群	古墳	35	当月遺跡	縄文前・中期
5	関山遺跡	縄文、平安	36	千足遺跡	縄文
6	狐原遺跡	縄文中、弥生後期	37	川合遺跡	縄文
7	大堀I遺跡	縄文中期	38	黒ノ木遺跡	縄文中・後期、平安
8	大堀II遺跡	縄文早・中期、古墳	39	田代遺跡	縄文中期
9	西シ原遺跡	縄文早・前期	40	東区遺跡	縄文中期
10	山風呂遺跡	縄文前期	41	駒門遺跡	縄文中期、弥生後期
11	向風I遺跡	縄文前期	42	奈須部遺跡	縄文早・中期、古墳
12	向風II遺跡	縄文中・後期、奈良、平安	43	上岩遺跡	縄文後期
13	八米遺跡	縄文中期	44	御靈遺跡	縄文中期
14	新屋原遺跡	縄文早・前・中期	45	下岩遺跡	縄文中期
15	黒田東遺跡	縄文中期	46	大畠遺跡	縄文後期
16	穴沢遺跡	縄文早～晩期、平安	47	喜佐蔵原遺跡	縄文後期
17	用竹（神戸）遺跡	弥生後期	48	一の尾原遺跡	縄文後期
18	用竹（殿村）遺跡	縄文早・中・後期	49	小日野遺跡	縄文後期
19	小倉遺跡	縄文早・前期	50	大日野原遺跡	縄文中期
20	上野山I遺跡	縄文後期	51	上小淵遺跡	縄文、古墳
21	上野山II遺跡	縄文中・後期、弥生	52	下小淵遺跡	縄文、古墳
22	上野山古墳	古墳	53	下小淵下遺跡	縄文、古墳、歴史
23	日野富士塚遺跡	縄文早・中期	54	関野道下遺跡	縄文中期、歴史
24	大倉遺跡	縄文早～晩期、 弥生、奈良、平安	55	関野増珠寺遺跡	縄文、古墳
25	芦垣遺跡	縄文早・前・中期、平安	56	漆久保遺跡	縄文後期、古墳
26	瀬瀬遺跡	縄文早期	57	鳥居原遺跡	縄文
27	大浜遺跡	縄文中・後期、平安	58	中村原遺跡	縄文前期～後期、 弥生、古墳
28	南大浜遺跡	縄文中期	59	上地敷遺跡	縄文、古墳
29	大門I遺跡	縄文中・後期、平安	60	開戸原遺跡	縄文
30	大門II遺跡	縄文早期	61	向原遺跡	縄文後期
31	仲山遺跡	弥生	62	葛原遺跡	不明 (打製石斧・磨製石斧)

1～42は、山梨県北都留郡上野原町。43～62は、神奈川県津久井郡藤野町。
藤野町については『ふじ乃町の埋蔵文化財』藤野町教育委員会 1978より作成した。



第3図 周辺の地形と発掘区 (1/1500)

第Ⅲ章 調査の方法と層序

(1) 調査の方法

発掘調査は、道路法面として掘削される区域に沿って $5\text{m} \times 5\text{m}$ の区画を 9 区設定し、A, B, C, D, E, F, G, H, I 区とした。そして各区画を 5m 每に掘り下げ、遺構や遺物の発見された場合拡張することとした。一方、調査区北東に隣接する扇状の緩斜地に $1\text{m} \times 10\text{m}$ の試掘溝を設定し掘り下げたが、地表下 50cm ほどで湧水を伴う黄褐色砂礫層が堆積しており遺構は確認されなかった。

(2) 層序

層序は次のとおり I～V 層に分けられる。

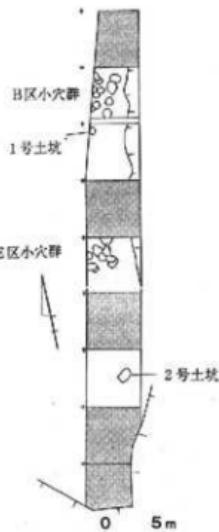
第I層 黒色土。現在の耕作土を含む。小石（ $5\sim10\text{mm}$ ）を多量に含み、乾燥しやすい。各時代の遺物が含まれる。下層との境は明瞭である。

第II層 暗褐色土。締まりがあり、粘性がやや強い。赤色スコリアを多量に含む。下層との境は比較的明瞭である。

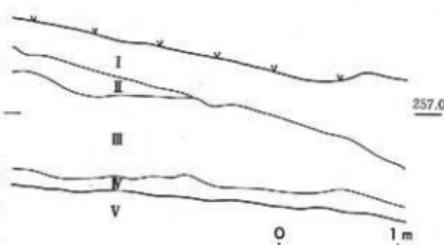
第III層 黒褐色土。固く締まり、粘性がある。赤色スコリアを多量に含む。織文土器片を含む。

第IV層 褐色土。固く締まり、粘性が強い。ローム漸移層である。赤色スコリアを多量に含む。

第V層 褐色土。ローム層である。
調査区域は東方向へ緩やかに傾斜して急崖に至る。台地上ではほぼ安定した層序であるが、崖に至って I 層が急激に層厚を増し、第 II 層～IV 層を欠く。



第4図 全体図 (1/500)

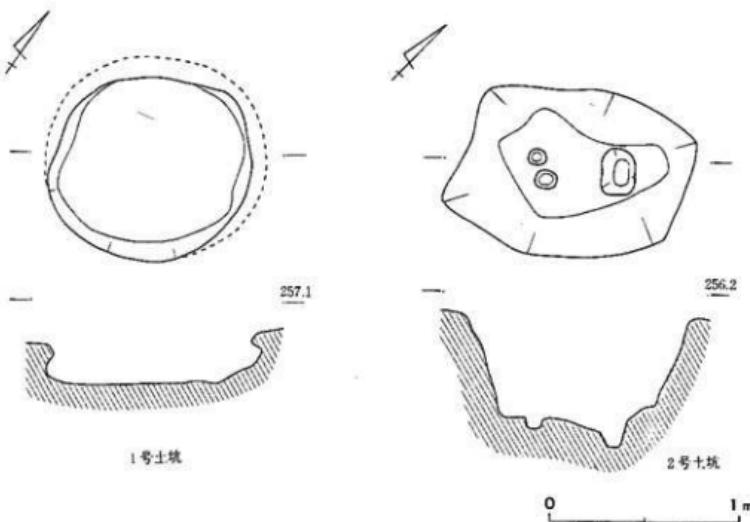


第5図 基本土層図 (G区北壁)

第IV章 遺構と遺物

(1) 遺構

遺構は土坑2基、小穴群が2箇所で発見された。1号土坑を除き出土遺物は無い。

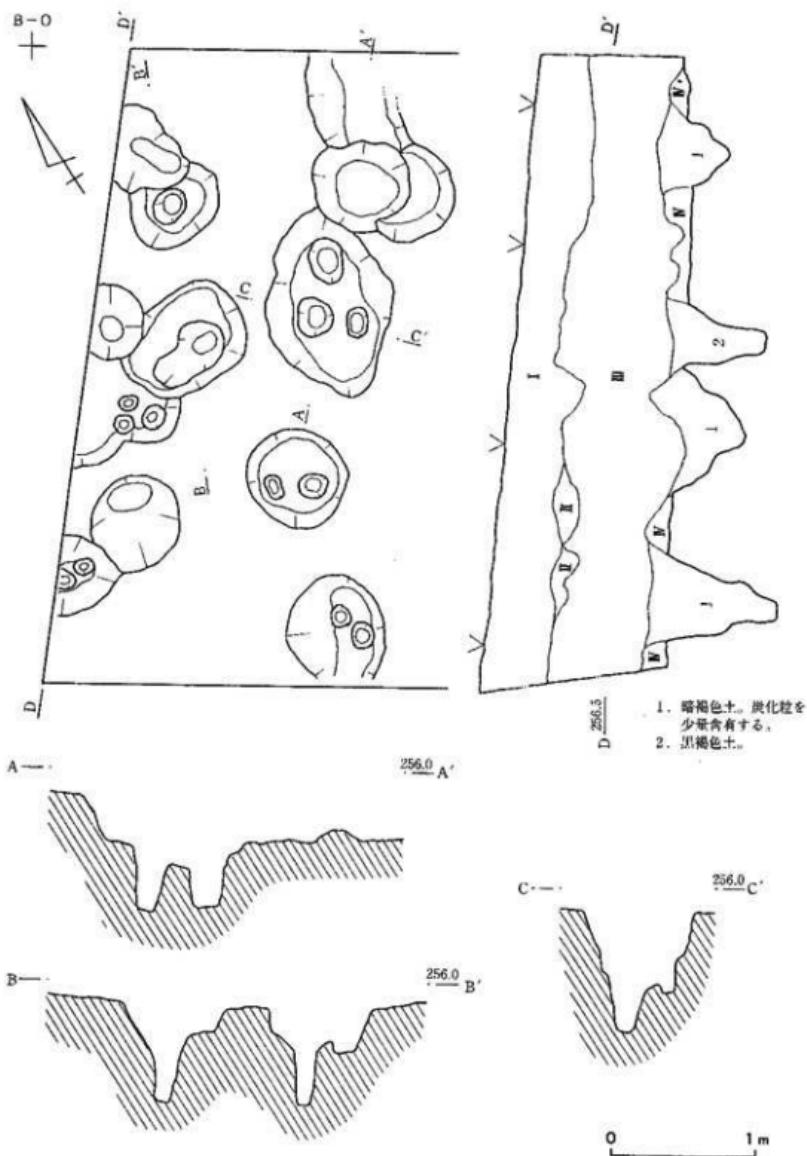


第6図 土 坑

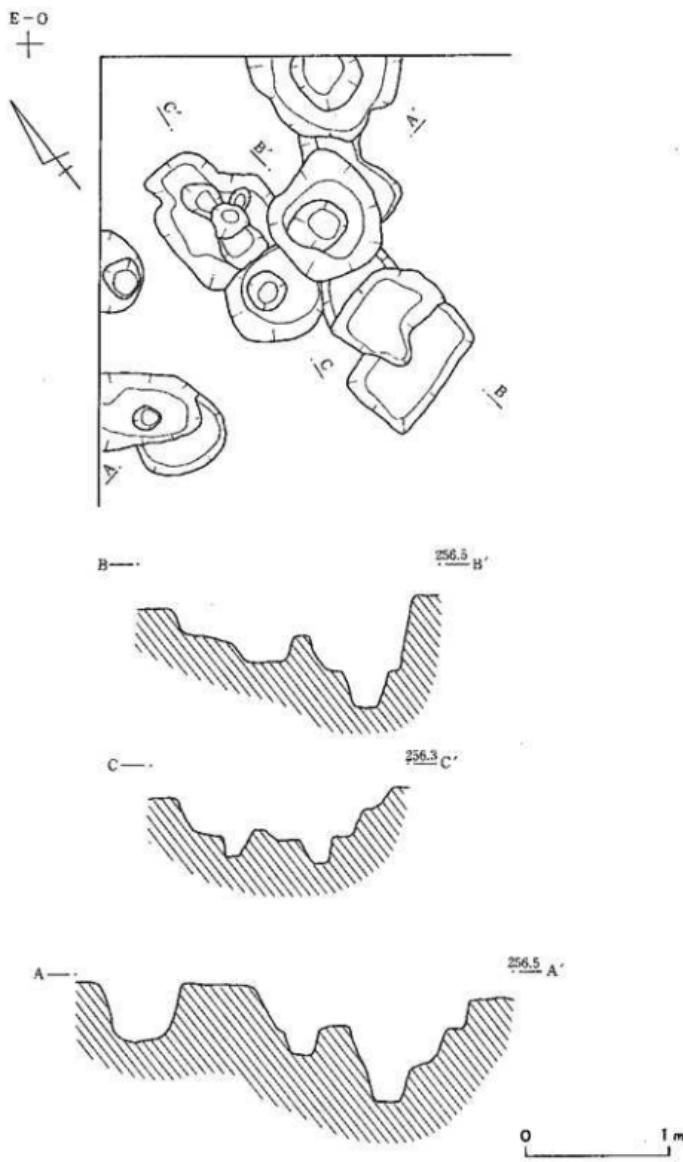
1号土坑(第6図)C区、第II層上面で確認された。平面円形を呈し、規模は直径100cmである。深さは確認面から15cmであり、断面は袋状となる。覆土中より土師器、須恵器の細片が各1点出土している。

2号土坑(第6図)G区、ローム層上面で確認された。平面不整長方形を呈し、規模は118cm×90cmである。深さは68cmであり、底面には3個小穴を持つ。出土遺物は無い。

小穴群(第7、8図)B区、E区のローム層上面で確認された。土層断面より第IV層から掘り込まれている。平面形は直径60cm~70cmの円形、不整橢円形である。断面形は漏斗状、あるいはすり鉢状で底面に小穴をもつものがある。確認面から最深部までの深さは40cm程度である。時期、性格については不明である。



第7図 B区小穴群



第8図 E区小穴群

(2) 遺物 (第9図)

遺構外出土遺物は総数133点が出土した。内訳は、縄文式土器70点、石器2点、弥生式土器2点、土師器44点、須恵器3点、近・現代陶器12点である。大半は磨滅した小片であり、表採、もしくは第I層中の出土であった。

1から22は縄文式土器である。1は細沈線と太沈線が施される。石英、白色粒子、金雲母を含む。色調赤褐色。早期後半。

2は単節縄文。繊維を多量に含む。色調明褐色。前期前半関山式に属する。

3は沈線文上に、円形貼付文および半裁竹管による刺突文が加えられる。黒雲母を含む。色調褐色。前期後半諸磯C式に属する。

4、5は集合沈線文、ソーメン状の貼付文が施される。5は口縁部に付く突起と考えられる。いずれも石英、黒雲母を含み、色調は赤褐色である。前期末十三菩提式に位置付けられる。

6から11は連続爪型文に沿って、細線文や三角刻印文が施される。結節縄文(11)が施されるものもある。9は横状把手、他は胴部破片である。いずれも黒雲母、金雲母、石英を含み、色調は赤褐色、褐色である。

12、13は集合沈線文が施される胴部破片である。石英、金雲母を含み、色調は赤褐色、褐色である。6から13は中期前葉五領ヶ台式期に位置する。

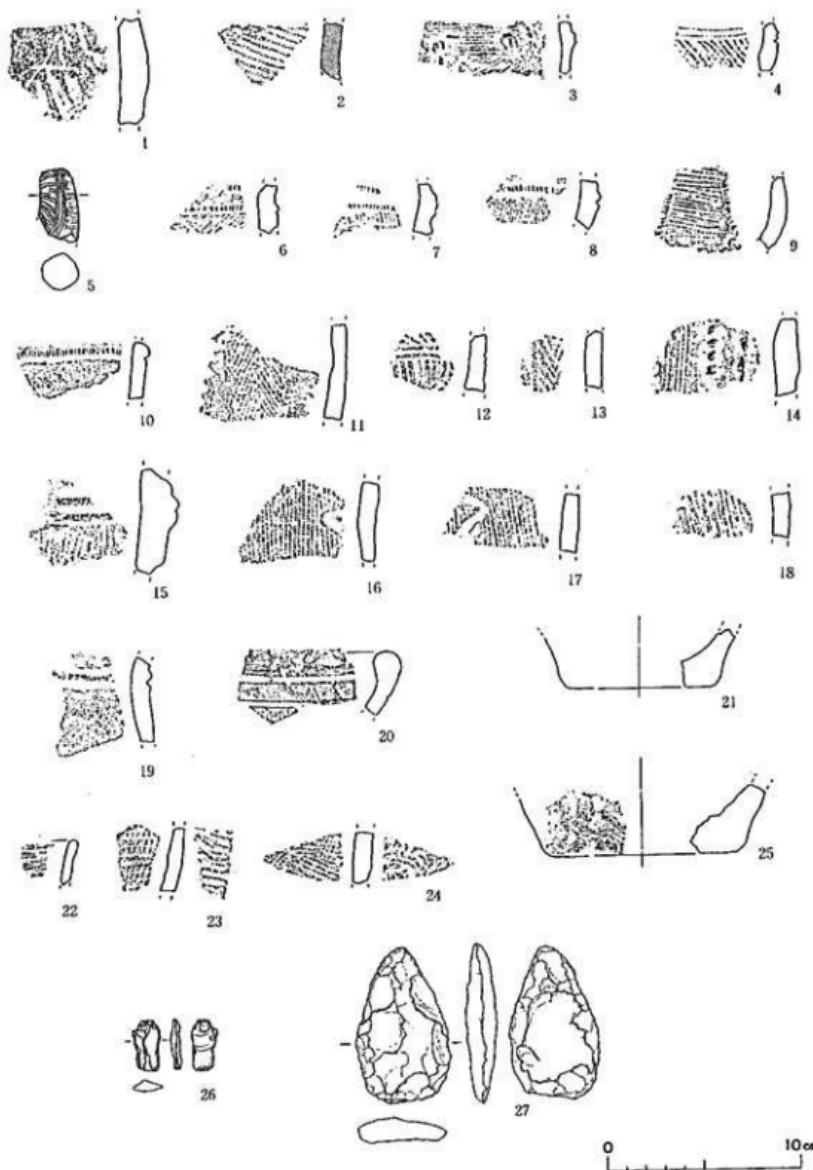
14から18は条線文が施される一群である。いずれも胴部破片である。16、17は蛇行する太沈線文が施される。石英、黒雲母を含み、色調は褐色、にぶい褐色。14、15は隆線をもつ。金雲母が含まれる。19は弧状の隆線と沈線文をもつ。金雲母を含み、暗褐色である。20は内折する口縁部破片であり、沈線文が施される。硬質で、砂粒を含む。褐色である。21、22は底部である。14から22は曾利式に属するものである。

23は弥生式土器の口縁部破片である。口唇部に刻み目をもち、外面はハケ目が施される。砂粒、赤色粒子を含み、色調は褐色である。

24、25は須恵器破片である。外面叩き目、内面同心円文様がみられる。

26、27は石器である。26は加工痕のある剥片であり、両側縁に片面から細かな剥離調整が施されている。石材は黒耀石である。27は打製石斧であり、石材は砂岩である。

各出土位置はつきのとおりである。3のみ調査区北東の試掘溝より出土した。4、17、18、20、22、23、24、27は表採。14はB区I層。1、6、9、26はE区I層からIII層。他はG区I層からIII層出土である。



第9図 遺様外出土遺物

第V章　まとめ

本遺跡では土坑2基、小穴群2基が発見された。

出土遺物は土器細片を中心に縄文、弥生、土師器、須恵器と幅広いが、主体をなすものは縄文中期の土器、および土師器であった。中期の土器群は、五領ヶ台式期と曾利期に分けられる。五領ヶ台式期の土器群は、細線文土器群（6～11）と集合沈線文土器群（12、13）に大別できる。該期の土器は穴沢遺跡で出土例がある。一方、曾利期の土器は周辺遺跡で数多く出土している。土師器は磨滅した細片ばかりであり、時期決定は困難であった。

出土遺物の大半が表採、および第I層出土であるため遺跡の時期決定に不確定な面のあることは否定できない。さらに崖縁の調査ということもあり遺跡の全容を解明するには程遠いものがある。今回の調査が今後の周辺遺跡群を考えていくうえでの試金石となれば幸いである。



遺跡遠景（北東より）
矢印で示した位置に桜ヶ丘遺跡がある。
台地の末端に位置し、東側は境川に面した崖となっている。



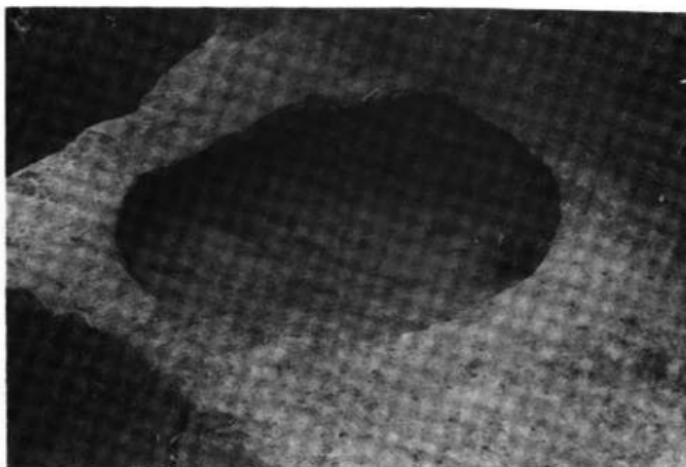
調査前全景（北より）



遺跡近景（北より）



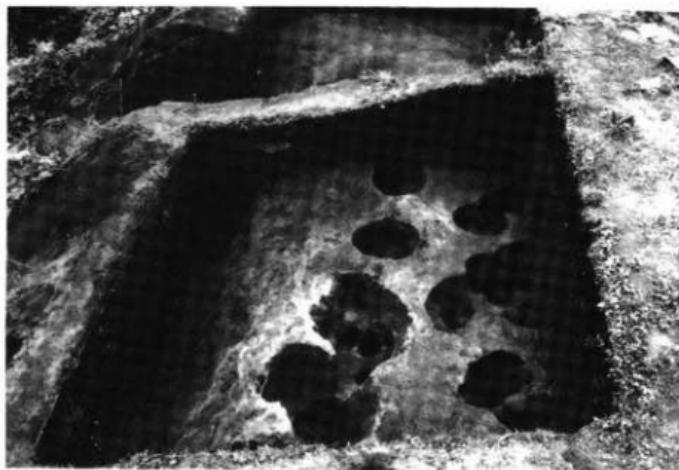
調査風景



1号土坑（北東より）



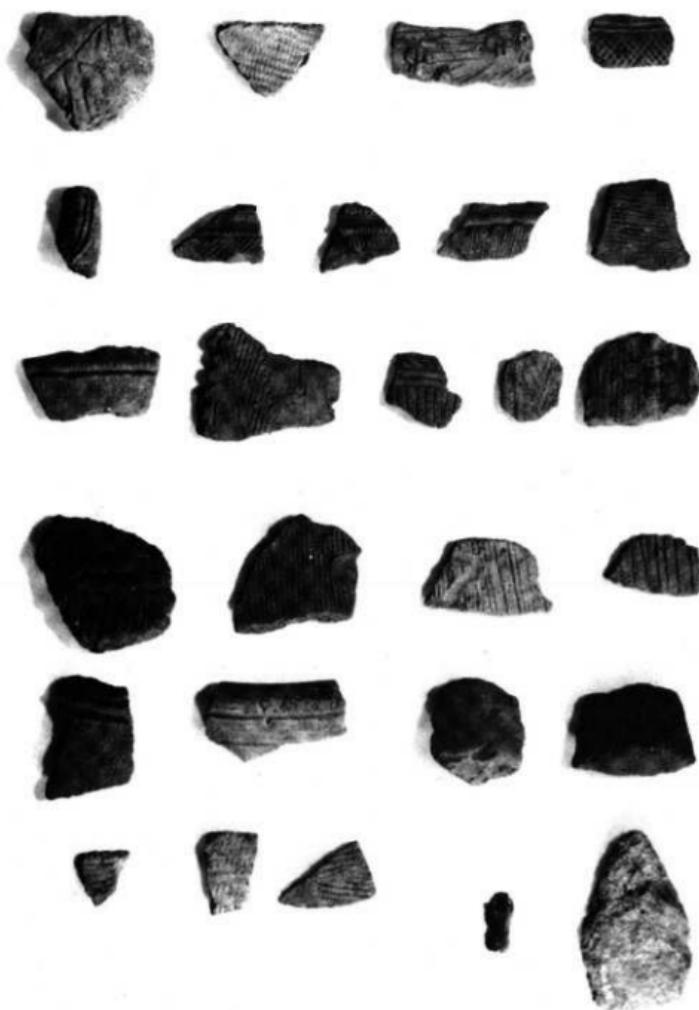
2号土坑（東より）



小穴群（北東より）



土層断面（南西より）



出土遺物

桜ヶ丘遺跡

1992.12.28

編集・発行

上野原町教育委員会

山梨県北都留郡上野原町上野原3504-1

TEL 0554-62-3111

印刷 健大月プリント社

